

を前提とすると、援助交際の関連性は明確に指摘できないが、欠落系は30人にのぼると考えられる。快楽系とバイト系は、5人ずつぐらいとなる。データの整理上は、欠落系：快楽系：バイト系＝5：2：3という類型を選択したい。

4 類型論の比較

4-1 売春女性との動機比較

1952年に労働省婦人少年局が行った「売春婦並びにその相手方についての調査」⁴⁾において、「転落(売春)の動機」として女性たちがあげた一番の理由は、生活苦(161名中91名、57%)である。この数字は、二番目の理由である好奇心(8.0%)や、三番目の理由である虚栄心と甘言(共に6.2%)を大きく引き離している。もちろん検挙された売春婦が当局者に自己正当化の意味合いをこめて「不幸な物語」を語っているという可能性も考慮しなければならない。

このデータから読みとれるのは、売春動機について生活苦が半数を超え他の動機を大きく離していることと、本稿で呈示した援助交際女性の動機一掃結の類型論におけるバイト系三割という数字との、時代背景の違いと言いうほどの開きである。現代社会の援助交際において、生活苦のために援助交際を行うという事情は筆者の耳にした限りでは、ほとんどない。例えば借金のために援助交際を行っていると話す女性もいたが、今回使用したデータ50件のうち2例だけである。またバイト系に類別された女性たちはほとんど、遊ぶためのお金や流行のブランド品を買うといった自己の所属している集団に同一化するためや仲間内でのコミュニケーションのためにお金が必要であって、決して生活苦のためではない。このことは援助交際女性に限らず現代の風俗嬢と呼ばれる人たちにも当てはまると推測できる[酒井 1998]。今回の類型で呈示した欠落系が全体の約半数を占めるという結果は、1952年から40年以上経て、性を売めることは経済的な欠乏を充足することから自己の欠落を充足することへシフトしていったという

考察を導き出すかもしれない。

4-2 他の援助交際データとの比較

援助交際について多くの社会学的分析を残している宮台真司の分析[宮台 1997 pp.142-144]によれば、援助交際を行っている女性のうち「お金は口実」派と「お金は必要」派との比率は三：七であり、さらに「お金は必要」派のうちでも「お金が人生の全て」と割り切れている「純粋物欲」型とそのほかとの比率では一：九となる。本稿で呈示したバイト系のうち、宮台氏の言う「純粋物欲」型はバイト系のうち数人が該当するので、ここでは氏の分析と筆者の分析は一致を見る。

筆者の50件のうちデータとして有効な39人のインタビューデータと照らし合わせてみると、本稿の呈示した三類型(欠落系：快楽系：バイト系＝5：2：3)は、欠落系と快楽系を「お金は口実」派と仮定し、バイト系を「お金は必要」派と仮定すると、七：三となる。問題なのは、宮台氏の「お金は口実」派と「お金は必要」派との比率は三：七という分析とは全く逆の結果を得たということである。この理由として、三つのものが考えられる。

この逆転が生じたことの一番目の理由は、宮台氏の援助交際に関するインタビュー取材が主に十代の女性、特に都内の女子高校生に対して行われているのに対し、筆者の取材が19歳以上の女性が七割近くいるという点である。筆者の取材からも、年齢的に高校生(18歳以下)に該当する女性は、バイト系が多いことは指摘できる。なぜ18歳以下の女性にバイト系が多いのかについては、3-3で示した愛と性的行為の一致の理想にあるだろう。この一致を称揚する漫画・テレビ・音楽・小説といったメディアの影響によって学習された性愛モデルが援助交際におけるお金を媒介とした性的行為を否定する方向に誘導しているためであると考えられる。

第二点目は取材地の問題である。筆者の取材が主に関西圏で行われるのに対して、宮台氏の取材が関東圏、特に東京都中心であるということに起

4) この調査は、東京都内において売春等取締条例(東京都条例)違反として、1952年の9月上旬から12月中旬までに検挙・送致され、検察庁が供述に信憑性があると判断した売春婦161名、相手方の男性44名についてまとめたものである[湯沢雅彦他 1991 p.63]。